

座談会

蘭学資料研究会発足の思い出

- 出席者 大久保 利 謙 (副会長・元職員)
 杉 本 勲 (常任理事・元九大教授)
 大 崎 正 次 (会 員・元九段高校教諭)
 金 井 圓 (会 員・東大名誉教授)
 石 山 洋 (会 員・元職員)
 桑 原 伸 介 (会 員・元職員)
 田 中 章 子 (緒方医学化学研究所員)



蘭学資料研究会は国立国会図書館所蔵の蘭書を母体に昭和29年創立され、以来35年独自の研究活動を経て今日に至った。昨春、創立以来の会長緒方富雄先生が死去されることあり、この機に研究会の将来に資するため発足時の経緯を顧みるこの座談会が催された。(桑原記)

☆

大久保 本日はお忙しい中お集まり頂いてありがとうございます。蘭学資料研究会(以下「蘭研」と略す)が発足して35年になりますが、3月には蘭研に多大な貢献のありました緒方富雄会長が亡くなり、そのほか蘭研の発足当時のことを御存知の先生方もお元気でいらっしゃいますが、だんだんお齡をとられておられますので、この辺でひとつ蘭研の創立の前

☆

後を中心として当時のことを正確に記録に残しておくことも必要ではないかと思われまますので、古い関係者にお集まりねがって、この座談会と申しますか、話し合いの会をいたしたいと存じます。蘭研が発足したのが昭和29年、戦後間もない頃で、学会もその前後からできてきて、洋学の研究も盛んになって来る、そのきっかけとなったのが蘭研ということにな

ると存じます。蘭研のできたきっかけは御承知のように、上野図書館の外庫から蘭書が沢山出てきたということもありまして、これは日本の洋学史、近代文化史研究のうえから非常に記念すべき重大事件でありますので、その前後のことをお話しりたいと存じます。



旧上野図書館・外庫(昭和38年桑原撮影)

発足直後から関係していらっしゃる杉本さんに司会をお願いいたしまして話を始めたいと存じます。

それでは杉本さんお願いします。

杉本 本日はみなさまご多用のところわざわざお集まり頂いてありがとうございます。大久保先生と重複することもありますけれど、私からもちょっと少し前置きをいたしたいと思えます。蘭研が発足したのは1954年(昭和29年)で、それ以後今日まで35年を経たわけですが、発祥当時会の中心的存在でありました板沢武雄、有馬成甫両先生、それからその興隆に最も貢献された池田哲郎先生も今はなく、最初から会長でありました緒方富雄先生も今春他界されました。しかし副会長の久保先生、本日わざわざご光臨いただいた金井圓、大崎正次両氏、また国会図書館側の桑原、石山、朝倉の三氏もみなさんご健在で大変心強い限りであります。今日は残念ながら沼田、箭

内の両氏は欠席されましたが。

蘭研はその発足自体きわめて劇的でありまして、その後の発展も大変めざましく、洋学史研究の主流としての役割をずうっと果たしてきたことは、万人の否定しえないところ、急増した会員、現在でもなお300人ほど在籍がありますが、その会員たちも会とともに成長して幾多の業績をあげております。但し緒方先生のご健康とも関連して、ここにきましてこの輝かしい役割に終止符を打とうとしておるわけであります。

数年前、『蘭学資料研究会研究報告』(以下『蘭研報告』と略す)の刊行が困難になりました時期に、その復刻が行なわれまして、私ども数人が解説を作成することになりました。私は蘭研30年の歩みを担当し、石山氏に蘭研事始を書いて頂きました。このほど大久保、桑原両先生が、数奇な蘭研の誕生の事情を記憶する人々が健在のうちに、いきさつを記録する必要を痛感されまして、私どもにもご相談がありまして、ここに当時のことをご承知の方々におあつまりいただいて座談会を催すことになった次第でございます。私は自分のことを言っただけなんです、1954年5月25日の新発見の洋書展示会がありましたときにお招きを受けながら、公務の都合で出席出来ず、そのため研究会の結成準備に関係しなかったのも、蘭研創始のいきさつは関知しておりません。しかし昭和32年以来約十年間、会の幹事役を勤めたところから、今回この進行係を仰せつかった訳だと思えますが、創始当時、衝に当たられた桑原さんに、事実上の司会をお願いして、そしてみなさんには自由に発言していただき、私はこの前置きと、最後の締めくくりの役目

を果たしたいと思います。宜しくお願いします。

上野図書館・外庫

桑原 蘭書が上野の図書館で発見されてきてそれが3,630冊が出てきましたのが昭和28年の暮れだった訳です。その蘭書を引き出してくれたのが朝倉、石山両君なわけですが、その発掘状況については後でひとつ石山さんから話をしてもらうことにしましょう。

そもそも蘭書が収蔵されていた書庫を、私ども上野図書館員は外庫と称しておりました。この外庫とは外の庫と書くわけですが、ごく通称なわけで、正式の名前ではないのです。今度この座談会の機会に、その外庫の写真でもご覧にしたいと思ひまして、上野図書館の館長に電話をして、その写真はないか捜してもらったんです。

ところが写真どころか、図面一枚残っていないというのです。完全に消えてしまっているわけです。それは単なる本を納めていた倉庫というものではございませんで、日本の図書館史上非常に由緒のある建物なんです。今日、影も形も存在しなくなったというのは誠に惜しいことだと思います。図書館の発展の上から見まして最初の自前の閲覧室がその外庫になっていたんです。

ここに『近世日本文庫史』という本がございますが、この見返しにたまたまその絵がでているんです。これをひとつご

覧願いたいと思いますが、こんにち外庫の面影を残すものはこれだけになっております。これは明治19年前後のおそらく『風俗画報』かなにかの挿絵じゃないかと思ひます。樋口一葉が処女作を出したのが明治20年、その一葉が図書館に通っていた頃の閲覧室だと思います。図書館が書籍館として誕生したのが明治5年ですが、それは湯島の聖堂です。そこに図書館は間借りをしておりまして、明治19年まで自分の建物を持たなかった訳です。

今回少し図書館の歴史を調べようと思ひまして、この『上野図書館八十年略史』を読み返してみたんですが、実に上野図



東京図書館閲覧室(『近世日本文庫史』見返しより)

書館の歴史というものは錯雑を極めまして、明治国家の財政状況なんか考えれば、容易に想像できますように、ちょっと予算が苦しくなると一番さきに切られるのが図書館の費用だったでしょう。例えての話になりますが、明治8年の地方官会議、会議場に湯島の聖堂がいいということ会で会場に予定されるんですね、そうすると図書館が放りだされて、行った先が浅草の米蔵です。それが浅草文庫という訳です。それから2年後の明治10年は、

御承知の西南戦争で、予算が戦費で食われる、図書館などよけいなものはいらないというわけで、図書館は廃止です。実際には利用者があるわけですから、東京府がそれを引き受けることになりました、東京府に移管されて済むわけですが、しょっちゅう名称が変わり、所管が変わり、そのたびに図書も動いたことも考えられますので、蔵書の移動をこんにち後を追おうとしてもなかなか追うことは出来ません。ただ残された資料の中で、明治7年の12月に、書籍館の数字があがっております。それをみますと、総計110,988冊のうちに、蘭書が6,062冊という数字があがっています。それから明治10年に、西南戦争で図書館が廃止になって、東京府が引き受ける。その時に文部省より譲り受けた図書の内訳の中には、蘭書はその他という“書目これなき分”と注記された中に和蘭書6,547冊という数字があがっているのです。前よりもちょっと数字が増えているのですね。すでに静岡の葵文庫の蘭書はこれ以前に移っていたと思いますので、あそこの蘭書とは関係ないと考えられます。

とにかく6千何百冊あったという数字が、実際に昭和28年に発掘されたときには3,630冊しかなかったということがございますね。これまで問題にされる機会が無かったとおもいますけれども、これはひとつ記憶にとどめておく必要のある数字ではないかと思えます。

先の外庫の話に戻りますが、これは明治18年に、図書館が再び東京教育博物館と合併する事になり、上野に移転する事になりますと、図書館の閲覧室というものをつくることになるわけです。この増築が明治19年の11月に出来ております。

『八十年略史』の記事を見ますと、“明治19年11月に閲覧室の増築成り、ほとんど200名を入れることを得たが、この月規則を改正し求覧券を、尋常と特別との二種とし、云々…”というように、ようやく明治19年になって図書館らしい閲覧室、先ほどの『風俗画報』の口絵に出ております、あの閲覧室ができたわけです。

明治39年に、現在の上野図書館の建物ができあがります。あれが出来るときに、それまでの閲覧室を移築しまして、それを書庫に使ったんです。それが外庫という訳です。先ほども申し上げましたように外庫の写真がございませんが、ここに一枚だけ私の下手な素人写真で恐縮なんです、これが外庫なんです。これは私が昭和38年こちらに来る前に、空になった図書館を撮って回ったんです（2頁に掲載）。それがたった一枚残っているんです。もっとしっかりした写真があって然るべきだと思いますけれども…。

私がこの口絵（画報）を見まして記憶していることを申し上げますと、この左端に階段がついております。この階段がまことに印象的でございましてね、立派な階段なんです。それからこの柱、天井が高くて、すっと伸びた柱は記憶しております。この間がびっしり書架が詰まっております、二階建てですけれども、一階も二階も書物が詰まっていたわけです。上野図書館の蔵書を甲と乙に分け、甲部図書、乙部図書と称しておりましたけれど、閲覧対象になっている図書を甲部図書といいます。ところが乙部図書というのは目録が出ておりません。すなわち閲覧対象から除きました図書を乙部図書と称したのです。蘭書はまさに乙部図書であった訳で、その置かれていた場所

はこの写真のちょうど見えております二階の隅に納まっております。そこから朝倉、石山両氏が引き出してくれた訳です。

実は朝倉君がいま非常に忙しくて、本来なら彼に話を聞きたいところですが、忙しくてとても出られないというので、どういきっかけて蘭書の存在を知ったか聞きましたところ、彼が図書館に入りましたのは昭和23年の10月だそうで、整理課の古書係に配属されまして、もともと書誌学に非常に関心が深い人ですから、特に蔵書印記などに関心が深い、その彼が同じ部屋の洋書係でたまたま、蕃書調所の蔵書印記のある本を見て、初めて外庫の中に蕃書調所の印記のある本があることを知った次第だそうで、それから石山さんの協力を得て出した。と、彼はそういうふうに言っておりました。話が飛びますけれども29年の第一回の内見会を開いたときに、板沢先生が述懐されたことがあります。蘭書の行方を自分はずうっと追ったけれども、どうしても所在がわからん。わずか100年にもならんのに、蘭書の行方が分からない。何処かにあるはずだと捜しまわったが、まさか捜しまわった蘭書が、灯台もと暗しというか、帝国図書館の地下に眠っていたとは、啞然たらざるを得ない、と述懐されておりました。

私感しましたことは板沢先生は、図書館の職員に聞けば案外簡単に分かったことではないでしょうか。と申しますのは、いま私申し上げたように、洋書係の人は蕃書調所の印記のある本のことを口にして、いうならば職員の間ではある程度周知だったんですね。それがどうして館外の人には通じなかったか、ここのところ

にひとつ問題がありましょう。図書館とそれから館外の学会との間が隔絶して、だから図書館の中では半ば常識化されたことでも、館外の人にはわからない。その状態がずうっと続いたことを立証していると思います。

蘭書が3,000冊出ました後のことになりますが、私は25年の5月に図書館に入っております。二年ほど病気で休職しておりますが、病気が治って図書館へ出発して、ちょうど蘭書が出たのにぶつかった訳です。

さて蘭書を発見したものの、この蘭書が今日的に、どれだけ評価できるかという問題、これについて図書館の中には専門家はおりませんから、まったく見当がつかない。そこで私ども参考課で、ひとつ学外の専門家の方々にご覧にいらして、いっぺんこの点を評価してもらおうじゃないか、ということで内見会を開くことにした訳です。

それが5月25日の内見会になった訳です。この時にももちろん蘭書全部出す訳にはいきませんので、これは一応めばしいと思われるものを、ちょうどこの部屋位の大きさの閲覧室でした。

大久保 外庫ですか。

桑原 外庫じゃありません。玄関脇の部屋にこんな机を適当に並べまして、蘭書を並べ、きていただいた方にみていただいたのです。これが25日の内見会で、いらした方々が一様に驚かれたわけです。この時の印象はあとで大久保先生からでも、ひとつ話して頂こうと思います。それで話は戻りますが、その蘭書を引き出すときの作業ですね、それを実際に担当した石山さんが来てますから話をして頂きましょう。

蘭 書 発 掘

石山 私が上野図書館に入りましたのは昭和27年の7月ぐらいだったと思います。ひと月だけ参考課におりまして、そのときに、桑原さんとか吉田邦輔さんとかおられて、朝倉さんともそこで知り合ったわけですが、ひと月ぐらいで整理課に移りまして、ちょうど芝盛雄さんという方がおられて、芝さんが整理課から参考課の係長になられるので、代わりに整理課に行けということで、行きました。そのころ朝倉さんと食事に行って、調査対象が洋書なので、参考課にいたとき、洋雑誌を読んでいた私と一緒にやらないかと誘ったのです。いま桑原さんが発見の事情についてお話があったんですけども、洋書係が蕃書調所の印のある本を知っていたということなんですけれども、実はその場合の洋書というのは、その当時洋書を買うお金が大変少なかったもんですから、古い本で未整理の洋書を少しずつ整理したらどうかということになって乙部の凶書を整理していた。その当時、整理課長に弥吉光長さんという方がおられまして、弥吉さんが外庫の中の蘭書を見つけて、こういうのをやったらいいんだろうといわれて、洋書係に少しずつ出してきては整理させておられたようです。ただ洋書係の人は、蕃書調所の本というものが、非常に重要であるというふうにはみていなかったように思います。

それから板沢先生にも伺ったことがあるんですが、板沢さんは上野図書館にも、東大の年報に移管したという記録があるわけなんで、蘭書に移管したことがはっ

きりでているので、戦前に『厚生新編』の原書を探索されておられたときに、上野の館長に尋ねられたことがあったそうです。ただその時は、上野の館長はそんなものはないと、ことわられたという話で、ご承知のように板沢先生は皇室博物館（現東京国立博物館）の所蔵する16冊本のショメール百科事典を対象になさいました。乙部のなかに入ってしまったからは、上野図書館の人もみな忘れてしまっていたんだろうと思います。私が上野図書館で外庫の調査をやるにつきましたは、外庫は鍵がかかっておりまして、普段、普通の人は入れないわけでした、私と朝倉君とでそれをやりたいと思ったとき、一応上司をお願いを出した訳ですけども、あんまり良い顔はされなかったのですが、まあ若い者が勉強するなら良いだろうということで許可して頂きました。ただ書庫管理部門のほうの人たちは、どうもそういった書庫をいじり回すということについては歓迎する様子にはしなかったんですけども、まあとにかく鍵を借りて土曜日の午後と日曜日を使ってやっておりました。私達どちらもまだ独身でしたし、その当時は非常に安い給料だったもんですから、何処へ遊びに行くということもなかったんで、休みの日を全部当てておりました。約半年位、昭和28年の夏から冬にかけて確かやっていたと思います。その当時上野図書館は一日の休みもなく開館しておりまして、日曜日でも開館しておりました。したがって日曜日に出てきて書庫に入ることについても出来た訳で、ともかく休みの日を全部あてて半年位やっております。

それを出してきてその中で、たとえばシーボルトが高橋景保へ贈った献辞のつ

いたチューケーの新地理学書なんかを見つけたときは、本当にびっくりしたものです。とにかく青地林宗や箕作阮甫なんて蘭学者の書き込みやら付箋やらがあるものですから、これには非常に感激をしております。夏は本当に暑くてむっとするようなところで、冬になればそれこそガタガタ震えながら外套を着たままでやっております。埃がものすごいもんですから、埃だらけでやっております。

しかしその当時はそんなこと気にならないもんで、ただまあ3,600冊位出てきたわけですけども、その中で蕃書調所とか、開成所とか、福山誠之館とか、いろいろな蔵書印があるわけですね。蔵書印べつに一応整理して、配列をして、それぞれに一度使用済みの目録カードの裏カードをつかってメモをつけて大体の分類をしておいたつもりであります。

それが出来たところに、これをなんとか表沙汰にしようというんで、またこんど上司に無理をお願いをしてくすね、『上野図書館紀要』というのを作っていただいたわけで、これも若気のいたりで皆さんにひどくいろんなことをいわれながら、上司のかたのご尽力を得て、印刷費も何もなかったものを無理してやっていただけでした。その紀要を配布する段階になって、これは一般に配布しても意味が無いんで、このさい内覧会をしようというお話になったと伺っております。

そんなことで、見ていただくことになりまして、そのときいっぺんに、いろんな大先生方にお会いすることになって、それからまあいろいろ御指導を受ける機会になって有難かったと思っております。その前後、静岡の葵文庫などにも行

きましたけれども、そこに、たとえば遣米使節が貰ってきた特許公報なんかあるわけですけども、その特許公報の片割れが上野図書館にあって、片割が静岡にあるという例を見ついたり、東京国立博物館にも行って相互につながっていることが、その当時初めて確かめた様な次第でした。またいろんなことを申しあげるところですが、皆様からお聞きがありましたら、お話ししたいと思います。一応終わります。

内見会開催

桑原 内見会の招待はどういう選択をしたのか、と今朝ほど大久保先生から問題にされましたけれども、これについて、ちょっとつけ加えて申し上げますが、先ほども申し上げましたように、でてきた蘭書が今日的にどう評価できるものか、全然私どもでは判断いたしかねましたので、専門家の方と漠然と考えた訳です。それで、当時何種類か出ていた学会の会員名簿をみんなで繰りましてね、当時この仕事をリードしたのはまだ存命ですけども、吉田邦輔さんなんです。吉田さんが全部発起しまして、その発案で5月25日に内見会をやるとうことになりました。いま申し上げましたように、名簿を繰りまして、案内状をどのくらいだしたか、ちょっとハガキの枚数を記憶しませんが、出席者は当日50人の方がみえております。もちろん名簿だけで拾い出したもので、初めてお目にかかる方がほとんどで、よく存じ上げておりましたのは、隣におられる大久保先生位なものです。大久保先生が図書館のバッジをつけて当日みえたのを覚えております。それ

で一番やっぱり喜ばれたんじゃないですか。ご覧になって……。

大久保 いま桑原さんからそのお話がありました。そういう貴重な蘭書がでたので、5月25日の内見会の50名の出席者の一人として私が出席したということになるわけですが、私はじつは戦後昭和24年の9月に、いまの憲政資料室が出来たときであります。憲政資料の調査を委嘱するという、非常勤で金森館長から辞令をいただきまして国会図書館にはいったわけです。翌年、司書になりまして、昭和27年に名古屋大学のほうに招かれまして、国会図書館のほうは非常勤で、今日までずっとお世話になっております。

そんなことで非常勤で図書館の一員であったのでありまして、私は歴史をやっておったのでそういう関係からか、そのときにお呼ばれたわけと思われま。5月25日かどうかすっかり忘れておりますが、とにかく上野の図書館にいったわけです。それまであんまり上野の図書館には閲覧には行ったことはありますけれども、内部のことは勿論知りませんし、それから戦後図書館の職員にはなりませんでしたけれども、その当時は憲政資料室は、今の議員図書館の参議院の方の四階に議員閲覧室があって、そこに憲政資料室ができて、そこに勤めておりましたので、上野にはあまり参りませんでした。そのとき内見会に参りまして、やはり大変驚いた一人でございます。内見会のときに、どういう方が来ておられたか、いま記憶がございませんが、さっきお話に出ました板沢先生、緒方さんと有馬さんとか、そういう方だったということでございます。そしてこれは発掘、まあ

発掘なんですね、今まで埋もれていた資料の学問的な評価と、およびそれをどうするか専門家の意見を聴こうという、私はあとでそれを知ったわけですけども、半年以内にそういう処置をてきぱきとされたことは、非常に上野の桑原君をはじめ関係当局のお若い方の非常に素晴らしい、処置だったと思います。戦後と言うのはある意味においていろいろな革新的で、新しいことにどんどん手をつける、あの頃は非常にそういう点で積極的で、この蘭書の発掘もですが非常に生かされてすぐ学会に半年経たないうちに提供される、そういうことになったわけでございます。そしてその時にどうなりましたか。蘭研ができたのは7月ですよ。桑原 内見会当日ですね。別にお誘いしたわけではございませんが、蘭書をご覧になった感激の余韻と言うものでしょうか、館長室にお集まりになったんです。残った方が館長室に集まられまして、いろいろな雑談会にはいったわけです。その中から自然に、ひとつこの蘭書を中心に研究会を持とうじゃないかという話が出て参りました。

大久保 その日に？

桑原 ええ、その日にもう作ろうじゃないかと

大久保 私も、その席にいたんですよ。

桑原 ええ、その時おられたの覚えていますよ。その時おられたのは板沢先生、緒方先生とか大鳥さん、有馬さんもおられました。矢島祐利先生もおられたようでした。蘭書が大量に出た、そのなんといか感激が余韻というふうに残っておりますね、いま申し上げましたように、館長室でそういう話になりました。

大久保 そうだ、そうだ。

桑原 で、その第二回目に金井先生は、第一回るときはみえてなかったですか。

金井 いえ、私は内見会に出ています。

桑原 やっぱりでられましたか。大崎先生はどうだったですか。

大崎 出ました。

桑原 ご覧になりましたか。案内さしあげているんですね。

大久保 そしてこれが夕刊にでましてね。

桑原 それは後です。

大久保 後ですか。

桑原 はじめは出ません。

大崎 蘭書をはじめて内示された日が、5月25日と29日とふたつここ（龍溪書舎刊『蘭学資料研究』附巻 p.10及び p.27）に書いてあるんですが。

桑原 でも25日が明かです。これは私が、実はここにございますが研究会の事務簿なんです。私がつけておったわけなんです。これに書いております。29日っていつの、それはなにかな。

大崎 石山さんのですが。

桑原 それはなにか誤植だと思います。25日は間違いありません。私の日記にまで書いておりますから。

大崎 それじゃ間違いはないですね。それからこの本（前掲「附巻」）の28ページのところに、その7月13日のはじめて集会があったとき、私もここへ参加したはずなんですが、名前が落ちているんです。

桑原 7月13日ですか。

大久保 7月13日、ここにありますがね。

大崎 そのときにこれ（『上野図書館紀要』第一冊）を頂いたんじゃないかなかったですか。

桑原 ははーあ、それをですわね。

石山 5月のときに、たしか差し上げた

と思います。

金井 最初に頂きました。

大崎 私このときたしか皆さんと一緒に、年も若かったものの一人ですから、記憶に無いんですが。

蘭学資料研究会発足

桑原 7月13日と申しますと、これは創立準備会なんですね。

大久保 あの日が創立準備会。

桑原 ええ創立準備会、7月です。

石山 それはここに書いてあったんですよ。桑原さんの名簿に名前が全部書いてあるんですが、これにないというのは署名されてなかったのかしら。

桑原 それじゃほか書き落としたんですよ。それは…

大久保 出席した人はこれだけですか。

桑原 これは会の終わった後書いておりますから、私の書き漏らしでしょう。13日にいられたと言っておられますんで。

大久保 会長は最初に板沢先生を

桑原 ええ、板沢先生を推薦したんですね。皆さんみんな。

大久保 最初はなんていったって元老ですから、板沢先生が当然会長という声が出たんですよ。

桑原 ええ、出ました。

大久保 それは内見のときですか。

桑原 内見会のいま言った館長室での。

大久保 館長室のときにその声が出たんですね。ですが板沢先生が固辞されてそして。

桑原 自分はパージ (purge) になっているから、自分は遠慮したいと。それで緒方さん、あなたなんなさいよと。板沢さんが。

大崎 あのごろ板沢先生だいぶすべて遠慮されておられましたから。

桑原 遠慮されておられましたね。

大久保 パージ、そのことか。当然そりゃもう板沢先生が最適任の専門のお方ですから。当然緒方さんもあれですけども、そういうことでしたか。それは内見のとき。

桑原 ええ、後終わりましたてやっぱりまだ興奮しておられましたね。

大久保 ええ、覚えていますよ。興奮していて、あの時分館長は加藤宗厚さんでしょ。その部屋に行きましたよね。

桑原 ええ、みえた方は50人なんですけど、ただ余韻を持った人たちが、自然に館長室に流れ込んで、何も私どもは言わなかったんです。

大久保 確かに館長室へ行きましたよ。私なんか、緒方さんとか、それで会を作ろうじゃないかと。

桑原 それで、自然に蘭学資料研究会というのが出来たんです。

大久保 あの時がつまり蘭研の発祥の日ですね。

桑原 いうならば発祥なんですけれども、正式には。

大久保 そのとき緒方さんは引き受けられたんでしょ。

桑原 ええ緒方さんはお好きですから。

大久保 いやその辺がはっきりしていない。それから幹事みたいな。

桑原 いや、幹事なんていうのは、副会長にはあなたがなられたでしょう。

大久保 副会長じゃなくてね、幹事長とかかんかですよ。

桑原 ああそうですか。

大久保 それから副会長になったのはね、私は一応館員でしょ。

桑原 職員のうちだから。

大久保 会員でそれから歴史だから、私が幹事長で、副会長になったのはあれはですね。館からはなれて独立したわけですね。そして緒方さんが会長になり、私が幹事長だったのが副会長になったんです。それは離れたときです。

桑原 離れたときですか。

大崎 ここに栗（蘭学資料研究会の栗、孔版の小冊子）があります。これがでたのが54年の12月10日、これに大久保先生が幹事長。

桑原 あのごろ、あなたは内部の人じゃないか、館の人じゃないかという声があったんですよ。だからなんかやれといわれて。

大久保 ええそうなんです。私は非常勤の館員でありましてですね、憲政資料室に勤めておったし、一応歳が歳だし、それから歴史が専門だから、それで幹事長になれというんで、実際の事務はあなたですよ。

桑原 結局、蘭学資料研究会の事務所を何処に置くかということになりまして、それを置くところがないもんですから、上野図書館に置くということになりましたので、自然と幹事役を上野図書館の参考課がやることになったんです。参考課がやることになりましたから、いきおい私がやらざるを得なくなった訳です。私は蘭学のほうは、全くの素人ですけども、たまたま参考課にいたものですから、幹事役を引受けさせられて、それで2、3年の間は蘭研のお世話をした訳なんです。

大久保 それで7月13日が研究会の準備会。

桑原 ええ、そうです。

杉本 ちょっと、石山さんが書かれた27ページ(前掲「附巻」)の下から4行目に、事務局長には池田哲郎氏がおされたところなのですが、で実際の就任は57年で、かなりのちですけれども。

桑原 そのころ事務局長とかなんとかというのは無かったです。私が世話をするようになったのも別におまえやれとか、表だって指名を受けたりしたことはありません。いま申しあげましたように、図書館の参考課が幹事を引き受けるということで、たまたま課員であった私がその幹事をやることになったにすぎない、何も研究会ができてから指名などはありません。

金井 会の発展に入る前に、最初の発見の喜びともうしますか、内見会のことで、ひとこと。私が内見会に呼ばれましたいきさつは知るよしもありません。ただ、たまたま私が東京大学の文学部を出まして、史料編纂所にはいって4年目というときです。そのころ私は史料編纂所の洋書目録の編纂に携わっておりましたし、あわせて岩生成一先生を代表とする日蘭交渉史研究会という会ができて3年目のことで、その会の幹事として、上野の日本学士院の書庫にありました和蘭商館日記の筆写本、いわゆる蘭館日誌というものの謄写版による翻字本をつくる仕事をやっておりました。そんな関係があるので、どなたのご推薦で呼ばれたのか、あるいは史料編纂所で洋書の仕事をしているから呼ばれたのか、いきさつはともかく、その最初の記念すべき5月25日の火曜日の午後、たまたま内見会に参加させて頂いた訳です。私はその日は、当時の規則によりまして職場を離れるためには、学外勤務という手続きをしなければ

なりませんでしたが、3時間の学外勤務を取りまして、上野の図書館に参りました。当時国会図書館支部とっておりました上野図書館に参り、入口の左の大部屋いっぱいにはひろげられた蘭書を拝見した訳ですね。

そのとき『上野図書館紀要』の第1号をいただいくわしい印記のこととか、分類のことなど初めて伺った訳ですが、そのあと館長室に移ってからのお話も、私はなんとなく覚えておるような気がします。

ただその当時私は史料編纂所の仕事もたいへん忙しかったんですが、同時に平凡社の『世界歴史辞典』の付録の日本史料、東洋史料、西洋史料のうち、後に『日本史料集成』という名前で単行本になりました史料編日本の編集のことで動き回っていたり、又大久保先生もご関係になっておられました小学館の『図説日本文化史大系』の編集の仕事もあって、内外いろいろ忙しかったせいで、どうも記録が残らないんですが、何か記録が残っていないかとさがして2、3日前にちょっと古いノートをひっくり返してみてもうしたらば、5月25日午後「蕃書調所本の展示をみて“低徊去るあたわず”3時間の学外勤務をたっぷり使った。」と、そう書いてあるんです。ただそれだけの記録なんです、これで日付も石山さんの書かれた29日ではなく、25日であったことがよくわかります。

そのことをちょっとつけ加えさせて頂きます。まさに余韻とさっき桑原さんがおっしゃいましたが、その余韻が私にもいまでも残っている感じです。

「洋学ことはじめ展」

大崎 昨日たまたま古い箱から出てきた
葉をいまおみせします。だいふ前に、緒
方先生からお手紙を頂きましてね。はじ
めの頃しばらくぼくは欠席がちで深く関
係していないから古い頃のことの記録が
ないから、君のところであればそれをぼ
くにくれないかっていわれたんです。そ
れで古いものの記録、手元にあったもの
全部を、緒方先生にお送りしたんですけ
れども、葉がまだ一部残っていたので、
それを今日持ってまいりました。先生に
送ったものは例会の通知のハガキとか、
いろいろ手元にありましたものを送った
んです。その後そういうものがどうなっ
たか、私の手元にはもうなくなりました。
今日たまたま今度の会合のことで、もう
一回ちょっと古いものをいじくりだしま
したら、後でお話が出ると思いますが、
事始展（丸善での洋学事始展）のときの
写真が二枚出てきたんです。

桑原 そうですか。それは珍しいですね。

大崎 これはね、展覧会が終わった後に
丸善でお茶が出たんです。その時の写真
だと思います。

桑原 この写真を拝見しますと、これ神
田茂さんでございませう。

大崎 皆さんお若いですよ。

大久保 これは我々も頂戴していたかも
知れないが。

大崎 だってね、僕は今77歳になったん
ですけれどね、その時は42歳ですから。

大久保 有馬さんなんか、まだお若かつ
た。

大崎 沼田さんは、僕と同年です。

大久保 大鳥さんなんか、ふさふさな頭

だ。板沢先生だって。

桑原 僕なんかまるで小僧っこだ。

大久保 どこ

桑原 これが僕ですよ。

大久保 ああそうか。ところで展示会、
事始展は何年ですか。

桑原 事始展は29年の12月です。会が出
来たはじめに展示会をやろうじゃないか
という話は早くに出ました。その準備
会をつくりまして、金井先生なんかその
仕事にきてもらうようになったわけだ
す。始めに展示会をやろうじゃないかと
いう話になったのも、緒方さんがそうい
うこと好きですから。

金井 7月13日の最初の準備会ですか、
そのとき私は石山さんの記録にも見えま
せんが、たしかに出席していないんです。
いないんですけれども、委員に指名され
たんですね。当時6月7日から8月10日
までヨーロッパ出張中の岩生先生も委員
の指名を受けられたようです。その委員
と言うのが蘭学資料研究会の委員であつ
たのか、洋学事始展の委員であつたのか、
はっきりしませんが、たぶん事始
展は、もっと後でしたね。

桑原 ああ、そうですね。

金井 その委員に指名されて、10月4日
には岩生先生と一緒に研究会に出席し、
展覧会の準備会は11月1日に始まっ
たと思います。

桑原 ええ、であなたが展示会の名前を
洋学事始展と、命名されたのを、私は覚
えています。あなたがとくに強調されま
した。

金井 たしかに私の記憶では蘭学事始展
か洋学事始展かという論議があつて、そ
の“事始”という文字をひらがなにして
ほしいということは、私の提案でござい

ますが、洋学事始展という名前はやはり緒方先生とか、あるいはご参会のみなさんのご意見だったと思うんです。ただそのときに「緒方先生、いま「事始」と漢字で書いたらいまのひと読めませんよ。ひらがなはいかがですか」と、ちょっと申し上げた覚えがあるんですね。そして「うんそれがいい」と、おっしゃったのが、緒方先生だったと記憶しています。

石山 最初は緒方先生だと思います。

桑原 いや私の記憶に間違いはないと思いますよ。

石山 かなにしようとおっしゃったのが先生（金井）ですよ。

桑原 その時「蘭学事始」をもじって洋学事始とはうまいアイデアだと、ひどく感心したことを覚えておりますからこりゃ間違いはないはずですよ。いよいよ展覧会をやろうということになり、会場を選定されましたのは緒方先生で、緒方先生の丸善との関係からだったと思います。じつは発足当初の蘭学資料研究会には金がぜんぜんないわけです。それで展覧会をやるって、いったい何処からどうして金をだすんだらうと、私は心配したおぼえがあります。緒方先生そういうことには一向無頓着でしてね。私はただの使い走りですが、もっぱら丸善との交渉にあたったのは八木佐吉さんです。この記録によりますと、丸善側のひとがだいぶん名前が出ておるようでございますが、私は他の方は記憶にありません。

八木さんとはずいぶん連絡をとりました。それでこの目録（『洋学ことはじめ展』目録）を出しました。これがそのときの展覧会の目録でございますけれども、これを編纂するときも八木さんにずいぶんお世話になりましたね。板沢先生のご注

文がありましたから、いろいろあとで追加したりなんかして立派な目録になりました。この費用がまた全然、これ無料でできた目録なんです。資金ゼロなんですから払う金なんかありません。これはだいぶん金がかかったはずですよ。結局、後でわかったことは全部丸善の負担なんでこれは。おそらく相当な費用を丸善は出したと思います。どれ位かかったか知りません展覧会全部で。今度聞くと、ころによりますと、来年また丸善で展覧会をやってくれるんだそうですけれども、今度また丸善におぶさっての展覧会になりそうですが。

杉本 丸善は援助するっていつてるんですよ。こっちが金ないことをよくご存じで。

学術助成金の申請

桑原 蘭研は創立から終わりまで丸善にお世話になることになりましたね。そういう台所事情だったんで、一番最初にひとつ金をどうしようかということで話があったのが、毎日学術奨励金だったのです。これはうまくいかなかった。あとで毎日からもらったようですけれども、最初の申請はみこみがたたなかつたです。それで文部省から貰おうということになりました。緒方富雄代表で文学部を経由しようというのが緒方さんの意向だったのです。ところが医学部教授が文学部に出すというのは、筋違いじゃないかとほかの方から指摘されてね、緒方さんもちよっと困ったんですね。だけれども医学部じゃなくて文学部から出したいというのが緒方さんの希望でした。そこでそれじゃひとつ岩生さんに頼もうということ

になって、岩生さんの、あのときもうすでに一年もらっておられたんじゃないかなかったですか、岩生さんのほうは、どうでしたかね。

金井 その辺の事情、お話ししていいですか。

桑原 どうぞ。

金井 石山先生の記録によりますと、55年目の2月にですね、昭和30年度ですか、1955年度の文部省の科学研究費を取ろうと思って緒方先生を代表とする申請をしたこと、その題目は『江戸時代における西洋文化移植の基礎的研究』ということだったこと、しかしこれは受理されなかったということがございますね。その前に毎日がだめだった訳ですか。それから文部省のこれがだめだったということだと思んですが、それが医学部からだったのか、文学部からだったのかまったく記憶にないのでわかりませんが、桑原さんのおっしゃる、もし文学部ということであれば、この55年の申請がなぜ落ちたかということの理由を今から推測致しますと、実はそのまえに1952年、53年、54年の3年間続けて岩生成一先生を代表とする日蘭交渉史研究会が金額でもうしますと、52年度¥370,000円、53年度¥370,000円、54年度¥330,000円を頂いたその翌年に、すぐ持っていったわけですね、代表者がどなたであれ文学部から同じ様なものを出して通るはずもなかったんじゃないかと思うのです。しかし一年おきましてさらに1956年ですね、これが桑原さんの記録によりますと、昭和30年(1955年)12月21日の例会で緒方、池田、金井、云々と、集まって相談をした、それから250万円の申請を17人ぐらいの人が集まって文部省に出そうということで、31年

(1956年)1月31日に医学部から出願したことになっています。

結果としてはですね、『19世紀における日蘭交渉の基礎的研究』という題名で、緒方先生を代表として医学部から申請した、ということですね。そしてそのときには、じつは前に3年間続けて、文部省からお金をもらっていた岩生グループとですね、新しく蘭学資料研究会を中心として動いております板沢グループと、このふたつのグループがドッキングしまして、緒方先生を代表として総合研究として出願するという形をとりました。その結果このほうは成功しまして、7月2日にそれが確定し、直ちに会議をやって、今度は使用計画ですか、そういうことをやっております。60万ずつ2年にわたってでたんですね。およそ申請額の250万にはみたくないわけですけども、これを岩生グループが30万とって、板沢グループが25万とって、緒方研究室に5万おいて運営を始めましょうということで、板沢グループの事務はたぶん桑原さんで、それから岩生グループの事務は私がとるということで、たぶん桑原さんと私とご一緒、あるいは、ばらばらにいつも医学部の緒方研究室にこの問題で出入りをしたものです。研究室の入口の前には緒方先生の白黒の全紙大の大きなお写真がありまして、その奥の広いお部屋に緒方先生がお一人でお座りになっていらっしゃいました。その部屋は私が働いている、7人で16坪の部屋よりも広く、その部屋にたった一人でお住まいで、なかなか羨ましく思った記憶がございます。

そんなふうにして、結局2年間続けて60万、60万ということで頂いたのが、これが財政的な基礎の確立に寄与したん

であろうというふうに思います。岩生グループはオランダ商館日記の1817年から1822年の謄写版刷りを作りました。

桑原 助成金関係の確実な経過は、いまの金井先生のお話の通りだと思います。私はただ記憶だけしかございませんで私の記憶では、あっちへ行き、こっちへ行き無駄な足をずいぶんした覚えだけしかございません。

だから順序を追った記憶がもう私ございません。いまおっしゃられたのがおそらく事実だったと思います。緒方研究室には私もずいぶん通いましてね、医学部の緒方研究室に行くには、建物を一周しなければならんようにぐるっと回るんです。建物の反対側の端に緒方研究室だけ別につくられたんじゃないかと思われるくらい立派な研究室でございまして、控え間付なんです。そこでいつも私は先生の時間のあくのを待っている。私は上野図書館から忍ばずの池を渡って医学部へ通り、そのついでには史料編纂所の金井先生のところに寄る。そういうことを2年あまりやってまいりました。

国会図書館では、そのまえにちょっと問題がございまして、図書館の中に外郭団体を置くことが厄介になりました。そんなことから蘭学資料研究会の事務局は何処かよそへ移って頂きたいという話になったようです。

それから以後が緒方研究室ということになりました。それまでの事務を私がとっておりましたのですが、それ以後は池田哲郎さんにおまかせしたわけです。池田さんはその前からなかなかご熱心でございましてね、上野によくみえました。

それから蘭研で全蘭書のフルタイトルの目録を刊行しようという計画がござい

ましたから、文部省の助成金でタイプライターを買った。ご承知のように蘭書のタイトルは非常に長いものですから、そういうのを打つには便利なタイプライターが良いと思い、プラトンのながいやつを買ったんです。だからタイプライター重いんですね。池田さんは福島大学の先生をそのころしておられましたけれども、リュックサックに重いタイプライターを詰めて行ったり、来たりされておりました。そのように池田さんはご熱心でした。ここに今日みえておられます杉本先生もそのときに池田先生とおなじ幹事役をやっていたのですがそのときのお話をちょっと。

杉本 私がたしか上野図書館で、いまお話のように今後はここでやれなくなるから、緒方研究室を本拠にしなればならないと、そこで池田先生が主として幹事を担当すると、私はよく覚えておりませんけれども、池田先生、はじめは非常に忙しかったものですから、池田先生の助手というようなつもりで指名を受けました。主任の池田幹事は仙台にお宅があり、福島大学に勤めておられて、それから東京にもアジトがあって、非常に八面六臂の活躍をされたことは私はこれにもかきましたけれど、池田先生の時代になってからの記録が、池田先生のお宅から数年前に未亡人に出して頂いて、会の本部に原本を置くことになりましたけれども、昨年奥様がぜひ調べてみたいからということで改めてお貸ししてあります。

これは結局は蘭学資料研究会が、今後どうなるかわかりませんが、とにかく緒方医学化学研究所がございましてそこに桑原さんのお書きになったものと一緒、永久保存するつもりです。

桑原 ひとつだけちょっと申したししておきたいと思いますが、この蘭研に図書館側がどういう形で貢献したかということ、この記録に残しておいていただくために申し上げたいと思います。

蘭研が出来まして毎月一回例会を持つということになりましたのですが、その例会にはハガキの通知書を出しました。それから茶菓を用意しました。わずかな金でございませけれども、一文なしの研究会からそういう費用が出るはずがありません。これは実は上野図書館長の交際費なんです。上野図書館長の交際費ですからわずかな金だと思いますが、そのわずかな金をせびりまして、参考課で出させまして賄っております。それで助成金をもらうまでのつなぎをしております。事務局を引き受けたということだけに限らず、図書館はそういう縁の下力持ちをしているわけで、ひとつ明記して頂くに足らんじやないかと思ひます。

大久保 初期にあなたが言われた有馬さんとか、初期に来られた熱心なかたのおはなしを少し話して下さい。

例 会 開 催

桑原 蘭研の例会を毎月一回やると申し上げました。そのとき有馬成甫先生、もう亡くなられましたが、この方が言われるには、研究発表される方がなかったら、いつでも言って下さい。私がいたしますから。と有馬さんは申されました。それぐらい有馬成甫先生は熱心だったんです。この『江戸幕府旧蔵洋書目録』を作るときも真っ先にこの作業をやって頂いたのが有馬成甫先生、それから今日みえておられる大崎先生、大島蘭三郎先生も

ご熱心な方で、はたからみればお身体がご不自由じゃないかと思われるのですが、実にご熱心に図書館に参られましたですね。暑いさなか駅から上野図書館まで、ちょっとした距離がございませけれども、参考課の部屋にこられますと、胸から万年筆みたいなものをお出しになるんです。万年筆かと思ひましたらそれが扇風機なんです。これは大島先生御存知の方は、ご想像願ひたいと思ひますが、万年筆形の扇風機でこうやって涼んでおられるんです。今でも忘れませぬ。
大崎 ちょっと一言。蘭研の例会が場所がいろいろ変わりましたが、いつ頃からいつ頃までどこでやったかというのを記録にとどめておきたいんですが、わかるでしょうか。

たとえば図書館時代と、池田先生が中心にされたのが本郷の学士会館、それから後で学士院のほうへ移って、それからまた湯島の日蘭学会、また順天堂大へ移って、だいぶ会場が代わってきますよね。また一時緒方先生あまり会に出られなくて、ある時代から非常に熱心になられた。それから中心の人物も、たとえば私、天文のほうに関係したんですが、仕事の関係でだんだん忙しくなっていけなくなったころ、ちょうど天文台の台長の広瀬さんが天文のほうを代表するようになって、やっぱり蘭学史も科学史と同じでそれぞれ専門がありましてね、やっぱりそれぞれの専門の代表みたいな方が例会、例会の核になっていったものですから、その辺のところもある程度はつきりさせたほうが記録としては大事なことじゃないかと思ひます。

桑原 いま最後のご指摘のことは、私の方ではちょっとわかりかねます。

大崎 そうでしょうね。私は実は神田茂先生の代理で、神田先生湯河原にいましたから、ほかに適当な人がいなかったもんですから天文の方はおまえやれといわれて、そのあと広瀬さんが出てきてバトンを渡したんです。

桑原 ああ、そうですか。専門分野の動きは私共、ちょっとつかみかねます。

大久保 大事ですがね。

桑原 ええ、そうだと思いますが。

大崎 それが、専門が代わるとわからなくなっちゃいますからね。

桑原 例会の会場は上野図書館に事務所のある間は、館長室でしたが緒方研究室にお返ししてからは外部になりました。

大崎 それからね、あの事始展の解説がああ頃としては実際に蘭書の標題をあげて、内容を説明したという点では画期的なものだったと思うんです。その蘭書のことをはじめ展の目録について、この本(前掲「別巻」)の30ページのところに2行目のところに、わずかにB6版、96ページの小冊子であるがとありますが、これはA5版、73ページの誤りだと思います。

桑原 これはもうまさに板沢武雄先生のご執心の固まりです。編纂の始まりから終わりまで…

杉本 蘭研の例会は図書館を離れて、池田、杉本もはいつて次の時代に入ってゆきますと、たとえば、例会の場所の話をするとな非常に長くなるから今回は無理だと思いますが、学会会館が主だと思いますが、学士院にもいったのですかね。

大崎 池田さんの時代。池田さんの時代には個人的にも池田さんのお仕事もずいぶんお手伝いしました。

杉本 それから高橋さんの共立女子大が長かった。

大久保 それから日蘭学会のほら…

金井 ごくはじめ湯島時代だけです。

杉本 それは日蘭学会が出来てからはね、ずうっとあとになって。

大崎 それにしても、蘭研の例会ほど楽しい学会はありません。

大久保 なかったんです。いや私はそれでね。

大崎 実に楽しいサロンでした。

杉本 サロン。

大崎 いろんな人が集まりますよね。人数は少ないけれども。

大久保 お話聞くよりも、ちょっと倶楽部みたいな、サロンですね。

『江戸幕府旧蔵洋書目録』

大崎 それからもうひとつ、『江戸幕府旧蔵洋書目録』というのを急いで作ったんですが、私ことをはじめ展と洋書目録と両方関係したんですが、このふたつのことの記憶の中でもっとも印象的なことがありました。それは何かっていいますと、蘭書の目録の整理というのがまさに埃との戦いだったということです。これはすごい埃でした。僕の記憶の中では、80年間の埃がたまっていて、朝倉さん、石山さんは、埃払ってくれたのかなと思いました。

全員 あっはははは…

石山 並べる前にね埃をとったんですよ。

桑原 ずいぶん綺麗にしたあとですよ。

大崎 今なら電気掃除機とかダスキンでやるとずいぶん違いますけどね、とにかくすごかったんです。

大久保 外庫の中に書庫があったんですか。

桑原 ええ、書棚が入ってありました。書架がずうっと並んでおりました。

大久保 ああいうふうには閲覧じゃないんですね。

桑原 閲覧は関係ないです。書架が並んでおりました。

石山 まわりには一応紐がかけてあったんです。ところが乙部図書として一応配架番号がついているんです。その通りに並んでいけばいいんですが、戦争中に疎開の関係で動かしたんです。そのときにごちゃごちゃになっちゃったです。

大久保 洋書がね。

石山 はい。

大崎 その発見当時のね、僕らが直接、僕は天文学関係のところを見たんですが、総合的な調査ではこの紀要の第一冊に書かれた朝倉さんと、石山さんの記録がいちばん最初のものだと思いますね。それから我々の手に移って埃との戦いになったんです。自分の天文関係の本をみるときはどんな本があるか楽しみがありましたけれども、洋書目録を作る時は、これは専門別じゃなくて、こっからここまではおまえさん、こっちからここまではあんたというふうに機械的に分けちゃったもんですから、何が当たるかわからないんですよ。

だから楽しみじゃなくなっただけ、今度はまったく埃との戦いになりました。

桑原 それは、申し訳ないんですが、それは私がやったのですよ。

大崎 そうですか。僕はひと夏、夏休みをあれて費やしちゃったんですよ。真夏の暑い盛りにね。それから私の記録にもちょっと書いてありますがね、池田哲郎さんは三ヶ月静養で、「これは埃の吸い過ぎだ」って言っていました。

桑原 私が図書館に入って2年ほど休んだと、最初申しましたが、実はそれも埃です。埃のために私、肋膜炎をやった。

大崎 とにかく埃がすごいですよ、埃のため手がすぐ真っ黒になっちゃうんです。汗を拭けないんです。それで僕は手ぬぐいを二本持って行きました。洗った後拭く。ハンカチじゃ駄目なんです。ハンカチだとすぐビショビショになっちゃうんです。何回も洗うから。

大久保 百年以上の埃ですかね。

大崎 それだけ特に、石山さんのもうさっき言われた埃の問題、僕も一番印象的に強く残っているんです。

桑原 いま埃の話が出ましたけれども、これは外庫の歴史と図書館の歩みを象徴するものです。無理に無理を重ねて、埃をはらうなんていうのは、問題でないのですよ。隙間があればそこに本を押し込まなければ、本を納める場所がないんです。図書館は。それ位冷遇されたのが戦前の図書館です。

だから明治39年に、現在の図書館が出来たときの新聞評はひどいものです。殺ぎ採った兎の耳だという悪評です。その建物が明治39年に出来て、それ以後全然本格的な増築がないんですから、戦前の図書館がどういう状態に置かれたかということ象徴するのがそれであり、埃なんです。

大崎 それからもうひとつ記憶の中にはっきり残っているのは、さっき桑原さんがおっしゃった、はじめの頃の有馬先生の意欲的な活動ぶりは、これは本当に熱心でした。それから残念だったのは鮎沢さんが早く亡くなったこと。あの先生も熱心だったから。だからやっぱりそういう特別な何人かが推進力で…

大久保 ああそうです。これらやっぱり記録しなきゃいけない。

大崎 それからその事始展の写真をどうしましょうか。その葉、寄贈してもよろしいんです。

『蘭研報告』

杉本 最初から蘭研は例会当日、あらかじめ発表されるかたの原稿をプリントしてお配りする。それをちょっとお話しして頂きたい。ずうっと続きましたからね。

桑原 第一回の研究報告の印刷のことにちょっとふれたいと思います。承知のようにガリ版刷りです。そのとき図書館に、もう故人になりましたが、古野さんという人がおりました、玄人はだしのガリ版切りだった。その方をお願いしました。

あのプリントは、その人の手になります。手書きのガリ版切りは古野さんの制作なんです。この費用も先ほど申し上げました上野図書館長の交際費から出しております。

杉本 そういう伝統は他の学会ではあまりないものでね。大変特別な…。池田さん、私等がやる頃もずうっとやはり、蘭研では、原稿を早めに出して頂いてプリントするというこれはもう習慣として残りましたが、最後の方はどうでしたか、最後は私わかりませんが。

田中 だんだんガリ版の印刷がむずかしくなってきた、そのころは六甲社さんをお願いしていたんですが、ガリ版を切ってくださいの方がだんだんいなくなってきた、そのまま続けるとすると印刷費がかなり高くなり、そうすると会費を倍ぐらいにしなればというこことになりました。(蘭研の原稿はタイプにない文字が多

いので) それでは発表する先生に書いていただくということになったんですが、先生方がお忙しいので原稿がだんだん遅れてきて、発行が困難になってしまったというのが現状です。

金井 大体会をやるたびに、受付に田中さんとか宮崎さんがいてくださったことだけでも普通の会と違いますよね。

大久保 田中さんの話もお聞きしなくちゃね。

杉本 こうなりますと蘭研発祥の頃ばかりでなく、隆盛期の頃のことも時間があれば座談会をやりたいなという気持ちもあります、もしやれるんなら改めてということに。

大久保 田中さんなんかの話をね。

杉本 田中さんなんかの活躍した話も、最後は田中さんも大変つらい思いをしたと思いますけど。

金井 それから地方で大会をやりますでしょ、ですから地方のグループの動きも含めてゆっくり話したいですね。

杉本 そうなんですね。非常に話すことがいっぱいあります。

大久保 私のところに静岡の新聞なんかありますよ。大会の記事がね。

杉本 また蘭研もはじめの頃は桑原さんのやっておられた頃からですか、朝日や毎日や読売に例会の記事を出して。

大久保 また時間があつたら次の機会に、でないかと取捨がつかなくなるから。

杉本 そうですね。そういうことでまた次の機会に、それではゆずらさせていただきます。

おわりに

杉本 それではこれで締めさせていただきます。

きます。蘭研発祥の後を受けて池田先生のご活躍も非常にめざましいものでしたが、その後について多少話し合ったらというおはなしもありましたけれども、時間もだいぶ経過してまいりましたし、実際興隆期の蘭研の仕事とはというのは非常に課題が山積しておりましたので、ここでとても話し合う暇はないと思います。今回は割愛させて頂いて、私が先ほど申しましたこの復刻版（龍溪書舎版）につきまして解説を書いたときに、蘭研30年の歩みとしてごく限られたスペースで時間的にも忙しかったですけど、その当時、蘭研関係の資料を調べて書いたものがございまして、それをご参照いただければ幸いです。

ただせっかくですから、その後の大きな事柄だけを列挙させて頂きますと、この56年（昭和31年）文部省学術補助金、いまお話の、それを授与されたのに続きまして、こんどは59年（昭和34年）毎日新聞の学術奨励金というのを贈与されました。これは50万ほどですけれども。それは先ほどもお話がありましたように、資金面でも多少余裕ができましたので、会の事業としましてまず、板沢先生も最初から、蘭研の会ができるまえからたえずお話になりました日本の国内にある洋書目録、特に蘭書目録をちゃんとつくる計画を立てる必要があるというお話であったんですが、この毎日新聞からもらったお金に基づいて蘭書目録、訳書目録とか、あるいは蘭学者名簿とかいうのを公約されたんですが、ともかく蘭書目録に全力を注ごうということで、会員が分担して資料採訪に当たることになりました。

それから1958年（昭和33年）に佐倉市

で開いたのを皮切りにして、毎年全国各地で大会を開きました。特に63年（昭和38年）には蘭研創立10周年を記念しまして、長崎・平戸で盛大な大会を催したことは、さきほど大久保先生ともお話し合いをいたしましたけれども、非常に印象に強いわけではありますが、なお、65年（昭和40年）、それから74年（昭和49年）のこの二回にわたって日本橋三越で展示会、大展示会といつていいでしょう、七階の催し場全部を使って展示会を催したことは、これは非常に思い出が深いんですが。

また69年（昭和44年）には私ども40数名が大挙してオランダに渡りまして、オランダ側と協力して日蘭シンポジウムというものを開いたということもございまして。つまり蘭研隆盛期にはいまからみてよくやったということ、枚挙にいとまないほどの華々しい行事を繰り返しております。

ただ80年に入りましてから、さきほどもちょっと述べましたように緒方先生の健康と関連してですね、会の活動も終息期に入ったと言わざるを得ません。いずれにしても蘭研が洋学研究史上で果たした役割といえますか、貢献は絶大と言つていいかと思つています。会とともに成長した会員達の活躍ぶりは現在なかなか盛んでございまして、私ども洋学史研究の先行きには明るい展望が開けているといえると思つているわけですが、それを明記しまして今日大変有益な発祥時のこまかい事実関係のお話などを承りましたこの座談会の幕を閉じたいと思つています。大久保先生はじめご参集の皆様、本当にありがとうございました。

金井 埋草にひとつだけ追加いたします。さきほど杉本先生がおっしゃいまし

たように、蘭研が生んだいろいろな影響ともうしますか、若手の人たちにたいする影響というようなことに触れまして、実は法政蘭学研究会というふうなものも板沢先生のご指導、引き続き岩生先生のご指導でいま活躍しております。それとまた不即不離の形で、洋学史研究会というのも発展しております。それからまた先ほど申しました日蘭交渉史研究会、蘭学資料研究会などを母体としまして、日蘭学会というのもできて結果はいろいろな形になっておりますが、蘭学資料研究会の遺産と言うものは、広く受け継がれて

いるんだということをつけ加えておきたいと思います。

桑原 ちよつとつけ加えますが、本日の座談会の要旨は国立国会図書館専門資料部の機関誌『参考書誌研究』の第38号に収録させて頂くことになっております。

杉本 今日の座談会は国会図書館の主催でやっていただいて、蘭研側としては大変感謝致しております、改めてお礼を申し上げたい、大変ありがとうございます。

年月；平成元年10月25日
会場；国立国会図書館